

ルカによる福音書12章49-59節 「時を知る」

1A 地上に投げ込まれた火 49-53

1B 選り分ける火 49-50

2B 家族の中の分裂 51-53

2A 他人任せへの警告 54-59

1B 今の時代の見分け 54-56

2B 和解の努め 57-59

本文

ルカ 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、12 章 48 節まで来ました。今朝は、49 節から最後まで一節ずつ読んでみたいと思います。全体を読みます。「49 わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。50 わたしには受けるべきバプテスマがあります。それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう。51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思っていますか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。52 今から後、一つの家の中で五人が二つに分かれ、三人が二人に、二人が三人に対立するようになります。53 父は息子に、息子は父に対立し、母は娘に、娘は母に対立し、姑は嫁に、嫁は姑に対立して分かれるようになります。」54 イエスは群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が出るのを見るとすぐに、『わか雨になる』と言います。そしてそのとおりになります。55 また南風が吹くと、『暑くなるぞ』と言います。そしてそのとおりになります。56 偽善者たちよ。あなたがたは地と空の様子を見分けることを知っていながら、どうして今の時代を見分けようとしないのですか。57 あなたがたは、何が正しいか、どうして自分で判断しないのですか。58 あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときは、途中でその人と和解するように努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行き、裁判官はあなたを看守に引き渡し、看守はあなたを牢に投げ込みます。59 あなたに言います。最後のレプタを支払うまで、そこから出ることは決してできません。」

イエス様はここで、大勢の群衆がいる中で話しておられたことを思い出してください。大勢の人たちが集まってきているのですが、イエス様は彼らが光のところに来ない、ご自身のところに来ないことを語っておられました。群衆の中で、兄が相続を分け与えないから話してくれないか、という声が聞こえました。イエス様は、貪欲の問題について語られたのです。そして、弟子たちには心配しないで神の国を求めなさいと言われました。そして、イエス様はそうやって主に従って来ている弟子たちを励まして、主人が帰って来るのを待っているしもべたちのようにしなさいと言われ、また食事時にきちんと食事を与えているしもべは、ほめられるということを話されました。

1A 地上に投げ込まれた火 49-53

このように、群衆の動きはイエス様に集まってきているのだけれども、実は、イエス様を求めているわけではなく、自分のことを求めて来ている中で、弟子たちには、世に抗うような生き方だけれども、しっかりとあきらめずにいなさいと励ましておられます。そしてイエス様は、弟子たちに対して語られ、群衆に語られます。キリストを拒む世があり、その中で弟子たちが、どんな近い関係であっても、主につか、あるいは敵になるのか、と、別れてしまうことを話されます。

ある牧師さんが、よく話していました。「終わりの日には、境界線にいるクリスチャンはやっていけない。」ということです。つまり、神の国と世との境にいて、どっちつかずにはなれないということです。世の友になって神の敵になるか、神の友になって世の敵になるか、どちらかでしかないようにされていくということです。私たちが人間的には、こう思ってしまおうでしょう。「あまり、神さまに献げないほうがいい。適当にエコ運転して、いい按排でクリスチャン生活すればいいから。」そう思ったら、確実にエコ運転どころか、全く運転できない車になってしまうでしょう。

海水浴をしているとします。潮流がちょうど反対の流れのところになるところまで泳いでいきました。自分は同じ海に見えます。けれども、全く違うところから来ている、反対に流れている潮流です。それで泳いでいるうちに、全く別のところに行ってしまいました。こういったことになるでしょう。どちらかに別れてしまうのです。真ん中にあることはできないのです。

1B 選り分ける火 49-50

49 わたしは、地上に火を投げ込むために来ました。火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。

イエス様が、「地上に火を投げ込むために来ました」と言われたのは何のことでしょうか？ここで、弟子たちに対して主人がしもべたちのところに戻る話をされたすぐ後であることを思い出してください。イエス様は、ご自分が再臨されて、ご自分につく者とそうでない者を選り分けることを語っておられます。旧約の最後の預言者マラキによると、選り分けがなされることが預言されています。「4:1-2 「見よ、その日が来る。かまどのように燃えながら。その日、すべて高ぶる者、すべて悪を行う者は藁となる。迫り来るその日は彼らを焼き尽くし、根も枝も残さない。——万軍の【主】は言われる——しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように跳ね回る。」主が地上に火を投げ込むと言われたのは、このことを意識してのことでした。悪を行う者は、ことごとく滅びるが、主の御名を恐れるものはかえって、義の太陽となり、癒しがあるということです。そしてこの後に、「4:4 主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」とされています。

そこで、バプテスマのヨハネが、エリヤの霊と力にやってきました。彼が話したのは、聖霊と火の

バプテスマです。「ルカ 3:16-17 そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、殻を消えない火で焼き尽くされます。」主が、聖霊によるバプテスマを授けられます。それは使徒1章で改めて繰り返し、2章にてその約束が実現しました。そして教会が生まれました。けれども、聖霊だけでなく「火」によるバプテスマも語っています。麦と藁に選り分けられ、麦は倉に、藁は火によってことごとく焼き尽くされます。イエス様は今、ご自身が戻ることを弟子たちに語られていたので、ご自身が戻って来られて、裁きが行われることを願っておられるのです。それは、主がここにいる弟子たちを苦しみから解き、御国の中に入れていたいという思いでそう言われたのかもしれませんが。

50 わたしには受けるべきバプテスマがあります。それが成し遂げられるまで、わたしはどれほど苦しむことでしょう。

イエス様は、今、弟子たちに心の内を明かしておられます。火によるバプテスマがあればいかによいことかと願われましたが、しかし、ご自身がその前に受けなければいけない、別のバプテスマがあるとされます。これは、十字架の苦しみのバプテスマです。バプテスマとは「浸す」という意味のギリシア語で、苦しみに経なければいけないということです。ですから、水の洗礼の儀式だけでなくこのように、浸される、一体化するという意味を言い表す時に使えます。イエス様は、聖霊のバプテスマによって弟子たちに力を与えられる前に、火によって人々を選り分け裁かれる前に、ご自身が苦しみのバプテスマを受けるようになると言われているのです。

2B 家族の中の分裂 51-53

51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思っていますか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。52 今から後、一つの家の中で五人が二つに分かれ、三人が二人に、二人が三人に対立するようになります。53 父は息子に、息子は父に対立し、母は娘に、娘は母に対立し、姑は嫁に、嫁は姑に対立して分かれるようになります。」

イエス様はここで、何か悪い宗教が戦争を起こすかのような話をしておられるのではありません。主がお生まれになる時に、天の軍勢は神を賛美して言いました。「2:14 いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」平和の主、神であられます。しかし、主の平和が人々に訪れるには、この方を自分の主として受け入れ、ひれ伏さないといけません。天使たちが言ったように、「みこころにかなう人々に」平和が訪れるのです。私たちの心には、争いがあります。それは自分の人生の主権者であられる神にひれ伏すか、それとも逆らうかの争いです。すべてを主に明け渡せば、その人には神の平安が満たされます。神と平和を持つことができたからです。「ロマ 5:1 こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエ

ス・キリストによって、神との平和を持っています。」

ところが、もし皆さんが、キリストによって神との平和を持つならば、皆さんの生活に、皆さんの周囲に神の平和が広がってしまうのです。つまり、神が王であり、キリストが王であるという領域が自分の周囲にも広まってきます。縦の関係が、横の関係にそのまま広がりを持たせます。それで、地上において最も強い結びつきである家族に分裂がもたらされます。そのまま、キリストを自分の心で受け入れたいと願うのであれば、肉の家族を超えて霊の家族となって結びつきます。ところが、キリストを自分の王としたくないとなれば、今までの肉のつながりさえ切れてしまう、と言うことが起こるのです。起こらなければ幸いなことですが、水と油の関係のように混じり合わなくなってしまいます。イエス様が群衆に語られるのと、弟子たちに語られるものの中にさえ、もう既に大きな乖離が起こっています。例えば、群衆には貪欲に対して警戒をせよと教えたが、弟子たちに対しては、食べる物、着る物について心配しなくてよい、主が必ず満たしてくださると約束されました。このように、価値観が水と油のような関係になっている中で、最も強い結びつきである家族の絆でさえも切られてしまうという、とても辛い現実です。

そして終わりの日には、人々の悪が増し加わり、キリストのゆえでなくとも、いろいろなことで躓く人々が増えて来ることを、イエス様は預言されました。そして家族の中でなんと殺し合いまで起こるというのです。「マル 13:12-13 また、兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に逆らって立ち、死に至らせます。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」興味深いことですが、キリスト者だということだけで何か悪いことをしてくる人は、実は神に対して反発しているので、他のことについても問題を持っています。イエスの御名のために憎まれるのですが、実はそうやって憎む人たちは、家族の間でも死に至らせるような憎しみを持っているということです。

その中で、エリヤがやって来て、「マラ 4:6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」とマラキ書の最後にあります。私たちの周りでも、このような悔い改め、聖霊の降り注ぎ、リバイバルが起こることを願ってやみません。

2A 他人任せへの警告 54-59

1B 今の時代の見分け 54-56

54 イエスは群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言います。そしてそのとおりになります。55 また南風が吹くと、『暑くなるぞ』と言います。そしてそのとおりになります。56 偽善者たちよ。あなたがたは地と空の様子を見分けることを知っていないながら、どうして今の時代を見分けようとしないのですか。

イエス様が言われたこの言葉は、なぜ今の時代の徴を見分けることができないのか？というの
は、マタイによる福音書にもあります(16:2-3)。イエスが約束のメシアであること、旧約聖書の預
言者が預言したとおり、イエスが成就しておられること、その徴が数多くあるのに、なおのこと徴を
求めてイエスを試す、その頑なさをイエス様は嘆いておられます。

しかし、今ここでイエス様は、「**群衆にもこう言われた**」とされています。マタイによる福音書で
は、同じ言葉がパリサイ人やサドカイ人に向けて話されていました。しかし、ここでは群衆に話して
おられます。つまり、こういうことです。群衆がユダヤ人宗教指導者の言うことを鵜呑みにして、自
ら判断していない、ということなのです。57 節に、「**どうして自分で判断しないのですか。**」とイエス
様が言われています。主体的に、主がなされていることが果たして約束のメシアのなされること、
その通りのことであるかを自ら進んで判断することができるのです。ところが、彼らはただ、ユダヤ
人指導者の言われるままにしていたという、受動性があるのです。

神の前に立つ時に、人間はおのおのが申し開きしなければいけません。「黙示 20:13 海はその
中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに
応じてさばかれた。」こうも書いてあります。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それ
ぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなけ
ればならないのです。」したがって、自分の人生について自分が責任を負わなければいけないの
です。ところが、「これまで、このように教えられてきたから。」「このように、これまでやってきたか
ら。」「今まで聞いたことがない。」というような理由では、神の前に出ていけません。私たちは聖霊
にあって、自分自身で判断して見分けて、それで主の御心を知るようにしていけないといけません。
それを放棄して、ただ言われるままに生きることをイエス様は咎めておられるのです。

私たちが神を愛する時に、イエス様はもっともの大切な戒めとして、こう言われました。「マタ
22:37 あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」愛する
とは、皆が左のほうを走っている時に、それでも右を進むようなものです。火事があるビルで
起こっていて皆が左に逃げているのに、それでもそこで助けを求めている人がいることを知って、
右に走っていくのと似ています。そこには心を尽くし、いのちを尽くすこともありますが、「知性を尽
くして」ともあります。よく考えるのです。

すると、二つの圧力を受けます。一つは、権威者です。「これが正しい」という権威付けがされて
いるのに、そうではないことをやるのですから。生まれつきの盲人が癒された後のことを思い出し
てください。彼は、ユダヤ人の指導者たちの前に立たされたのに、大胆に、癒された方は神から来
た方なのだと断言しました。そのため、彼は共同体から追い出されました。(ヨハネ 9 章)そしてもう
一つは、群衆です。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という言葉の通り、みんながやっているか
ら、ということで物事を何となく決めることは、とても簡単です。けれども、それは神を愛することに

悖るのだということを知る必要があるでしょう。

2B 和解の努め 57-59

57 あなたがたは、何が正しいか、どうして自分で判断しないのですか。58 あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときは、途中でその人と和解するように努めなさい。そうでないと、その人はあなたを裁判官のもとにひっぱって行き、裁判官はあなたを看守に引き渡し、看守はあなたを牢に投げ込みます。59 あなたに言います。最後のレプタを支払うまで、そこから出ることは決してできません。」

この喩えは、他の福音書では人と和解しなければいけない、赦しが必要であるという文脈の中で出てきます。イエス様は人との関係でこのことを話しておりません。これは、ご自身と群衆一人一人の関係の中で話しておられます。イエス様が告訴しておられる方です。そして、裁判官は父なる神です。イエスが罪の定めようとしている中で、しっかりと和解しなければ永遠の刑罰の中に入れられることを警告しているのです。

ここのイエス様の言葉で大事なのは、「努めなさい」という言葉です。主が戻ってこられること、主が裁かれることについて、熱心に自問自答しなければいけないということです。しっかりと、主がなされようとしていることを見る、霊的に怠けてはいけないということでもあります。霊的に怠惰になってはいけない、ということです。主に立ち返ることに、悔い改めることに熱心にならないといけないということです。何となくで、主との和解はできません。イエス様は、ラオディキアにある教会に対して語られました。「黙示 3:19 わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。」熱心になって、悔い改めるのです。

キリストが十字架で死なれる言葉は、和解の言葉です。「2コリント 5:18-21 これらのことはすべて、神から出ています。神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なのです。私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方において神の義となるためです。」神の和解を受け入れるかどうか、一人一人に問われています。神はすでにキリストにあって和解しておられるのです。けれども、受け入れる必要があります。その愛を、その赦しを受け入れる必要があるのです。心をどうか開いてください、そしてキリストが既に十字架で死なれたのですから、愛を注がれたのですから、それを受け取ってください。